

## 発表番号26

### 赤谷プロジェクトって！知っていますか？ ～赤谷プロジェクトを効果的にPRするため広報戦略を作成しました～

赤谷森林環境保全ふれあいセンター  
自然再生指導官 栗田 喜則

#### 1 課題を取り上げた背景

赤谷プロジェクトは、「生物多様性の保全」と「持続的な地域づくり」を目的として、平成16年に発足しました。当初は、自然保護団体との協働管理という枠組のため、中盤は茂倉沢の2号ダムの改修工事時のため、社会の注目を集めて来ましたが、その後は、赤谷の森基本構想の策定や赤谷の森管理経営計画の策定があったものの、情報発信が十分ではなくマスコミなどの取材や森林・林業関係者等の視察などが減少しました。



中央部を撤去した茂倉沢2号ダム

赤谷プロジェクトの普段の活動は、基礎情報としての自然環境等のモニタリングや「生物多様性の復元」を目的として行った試験的な取組みに対する動植物等の反応の把握などの地道な作業が大半です。

このような地道で長い年月に渡る取組みは、国民の皆様からの支援なしでは成り立ちません。そのため赤谷プロジェクトの取組みを知っていただくために、今までの広報活動の問題点を洗い出し効果的なPR活動を行うために「赤谷森林環境保全ふれあいセンター（以下「赤セ」という）における赤谷プロジェクト広報戦略企画書」を作成することにしました。今回は、広報戦略を作成するまでの取組みに至る経緯とその中間成果を発表します。

#### 2 取組みの経過

広報戦略を作成するにあたって、これまでの取組みを分析し、「職員でできることは職員で実行！」を合言葉により効果的なPR手法、より小回りのきいた活動とすべく、赤セ単独で実行できることを考えました。

##### (1) これまでの普及啓発活動について分析、数値化

①視察・環境教育の受入れ②情報誌の発行③関東の森からへの寄稿④ホームページの活用⑤新聞等への掲載⑥業務研究発表への参加などを数値化し分析しました。

##### (2) 赤谷の日サポーター参加者数の推移

赤谷プロジェクトには、プロジェクト理念に共感し、プロジェクトの活動にボランティアで協力してくれるサポーターの存在が欠かせません。そのサポーターを中心とした活動日が毎月の第1土日に行われてい

る赤谷の日ですが、そこへの参加者数は、年平均約300人のリピーターによって支えられています。赤谷の日の参加者数の推移を見ると、平成24年度と18年度に激減しており、原因は、赤谷の日の活動等に魅力が感じられなくなったと推測しました。関東局職員に赤谷プロジェクトの知名度について聞いてみると「名前は知っているが何をやっているのかわからない」という意見が多く聞かれます。

##### (3) 赤谷プロジェクトのイメージについて（平成22年度委託調査報告書より）

発足から7年を経過した平成22年に、地域の人たちに対し赤谷プロジェクトに関する意識調査を行いました。認識は総じて低く、「何をやっているかわからない」という意見が多く聞かれました。一方、赤谷プロジェクトの取組みを説明すると、良い印象を持つ人が多く、「もっと地域住民に知らせて欲しい」という言葉も聞かれました。

#### 3 実行結果

##### 広報戦略7つのポイントを策定及び中間成果

- ①地域の核となる情報発信基地を設置
- ②「赤谷の森だより」をより効果的に配布
- ③ホームページ・メルマガを積極的に活用
- ④業務研究発表へ毎年参加
- ⑤局・署等が参加するイベントブースに積極的に参画
- ⑥ふれあい業務等の技術的な指導及び支援を積極的に実施
- ⑦「赤谷の野生生物カード」を広報手段として積極的に活用



たくみの里のオープンした赤谷プロジェクトPRブース

#### 4 考察・まとめ

これまでの、生物多様性の復元に係る科学的知見を得るべく、植生や猛禽類等に関するデータの収集・分析や、協働管理のための仕組みづくりなどプロジェクト関係者間の調整に重点を置いてきたため、対外的な情報発信について必ずしも十分ではありませんでした。

今後は、モニタリングの結果やこれまで得られた知見を対外的に発信できるよう整理するとともに、みなかみ町内におけるプロジェクトの認識を高め、「持続的な地域づくり」の観点から、みなかみ町等との連携を深め、地域振興に結びつくような情報発信を行って行きたいと考えています。